

## 江戸幕府所司代赴任時の老中上京について

荒木 裕行

近世期、京都に設置された幕府役人である所司代が赴任する際、老中が同行していた。これは引渡上京と呼ばれる。引渡上京は所司代が交代するときの引き継ぎに由来しており、新任所司代へ老中が朱印の捺された判紙を引き渡すことを中心とする儀礼であった。

当初は所司代交代の際は、前任者が在京中に新所司代が上京し、時間をかけて引き継ぎが行われていた。天和から享保期にかけて、所司代の権限が縮小されたことを背景に、引渡上京がはじまった。最初のうちは引渡上京が行われない場合もあったが、享保2年(1717)と10年に朝廷との交渉のために老中の上京が続き、それによって引渡上京は恒例化した。

引渡上京は定着するとともに儀礼化が進み、その結果、引渡上京は必須ではないと幕府は判断するようになった。そのため文化3年(1806)以後は省略される場合もあった。ただし、老中が上京することは、幕府の権威を民衆に意識させる意義を持っているなど、幕府にとって価値のないものではなかった。

嘉永3年(1850)に老中松平乗全が上京した際には、京都市中の経済情報や公家衆の評判などの風聞書が京都町奉行から提出され、その情報は幕府の政策判断にも利用されるものであった。また松平の上京を利用して、朝廷は海防体制強化を求める意思を伝えようとした。さらに安政4年(1857)には、引渡のために上京した脇坂安宅が、アメリカ領事タウンゼント・ハリスの登城に関する情報を朝廷へ申し入れた。このように幕末期になると、対外的緊張感の高まりと朝幕関係の重要性の増大によって、再び引渡上京が朝廷との交渉に利用されるように変化していった。